

放流技術開発調査（ヒラメ）

○小田切譲二・木村 大・奈良 賢静・池内 仁

発 表 誌 名

昭和58年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班），昭和59年1月，P13～24

抄 録

1. 種苗放流海域における58年の天然稚魚の生息尾数は60万尾と推定されたが、これは57年の四分の1，近年では最も多かった55年の十分の1に過ぎない。
2. 人工種苗の小型群（平均全長2.7cm）53,000尾を十三湖に直接放流し，地曳網，投網，そりネットで追跡したところ，放流後24時間以内の減少が極めて大きいことが明らかとなった。
白化魚は正常魚と比べ，摂餌している個体が少なく減耗割合は高かった。
3. 人工種苗の大型群（平均全長12.4cm）25,261尾に標識票を付けて放流したところ，295尾が再捕された（58年12月20日現在，再捕率1.2%）。再捕までの経過日数は70日以内，移動距離は30km以内であった。標識としてはアンカータグのみのものよりも，ディスクを加えたものの方が3倍ほど多く再捕された。ディスクがあると，再捕漁貝の刺網から逃げにくくなるためと考えられる。
4. 天然における無眼側の色素異常魚の出現率は0才で0.2～0.3%，1才魚以上では2.6%であった。軽度色素異常は，後天的な原因によって生じたものと推測される。